

## 吉屋信子と郡立栃木女子高等女学校

——台覧作文、校友会寄稿文、講演記録など

黒澤 亜里子

吉屋信子（一八九六—一九七三）は、少女小説『花物語』の作者として知られる。大正から昭和初期にかけて十代の少女たちの熱烈な支持を得、菊池寛、久米正雄らと並ぶ大衆文学の人気作家としても活躍した。ここでは、文壇登場前の吉屋信子の郡立栃木高女時代の文章を調査、発掘し、新資料として紹介する（資料の一部は、平成十四年度国内研修に際し、「吉屋信子の〈花物語〉」および栃木高女時代の初期テキストの書誌的研究）として報告書に記した。

### 資料1 「初秋」

『下都賀郡立栃木女学校作文帳』栃木市第五四〇版 明治四十三年九月発行

（署名） 本科第三学年一組 吉屋信子  
（本文）

夏去り秋来る誰か感慨なからむや 稲は青く田に並べり 天高く馬の嘶きひびきて読書に候よし 我等勉めなむ哉 あゝ初秋そも吾に何をか教ふる 晨置く露だにいとふ女郎花 優しう咲ける大和撫子 さては小川に影をうつして笑める小萩もいと美し 朝顔の枯れたるハはや土に埋もれぬ 目もあやなるコスモスの紅に白に或は薄紅に垣根を飾りて風にゆらめく 趣味いかに多からずや

真晝 日は花やかに緑を照せり 庭の銀杏の葉茂れるが扇の要のとけてはらはらとちる日もほど近し 赤とん

ぼの力なう飛ぶにあはれうらぶれの子よいづこへか行くと見る間に彼はさゝがにの網に捕られぬ 逝く夏の哀いかに深からずや

夕 ほのかに匂ふ月見草 三日の櫛月青白う森かげより昇れば月宮の合唱が叢より起る 楽の一曲或は高く或はひくゝ金鈴をふるが如く銀板を叩くが如し げにやさびしき初秋の夕 逝く時の早きを示して我が怠りを警しむるよと空打仰ぐ 折しも庭の桐葉音なく落ちてはたと筑の水を打ちぬ いか静けき夕ならずや

(解題) 一九一〇(明治四十三)年九月十日、皇太子嘉仁親王が同校を訪れた際の台覧作文である(墨筆)。当時、吉屋信子は十四歳、すでに十二歳頃から『少女世界』『少女界』への投書を始め、当選のメダルや賞金なども得ていた。初秋の移りゆく季節の気配を擬古文風の抒情的な筆致で描写しており、女郎花、撫子、小萩、朝顔、コスモス、月見草等の花々への愛着も記されている。

## 資料2 「轉宅を報ずる文」

『校友会誌』第二号 明治四十一年七月二十三日発行)

(署名) 本科第一學年一の組 吉屋信子

(本文)

日ましに暑く相成り候て昨日などはネルも脱ぎたき程に候ひしが皆様には御変りなく候か／扱御承知のこれまでの住居は町はづれにて不便に候上むさぐろしく候ひしかばよき家候はゞ轉せんものとは存じつゝも忙しきまゝに打過ぎ居候ところ幸ひ此度表記の處空家と相成候故少々普請いたし昨二日一同こゝに引移り申候この度は以上とちがひ居心もよろしく候上後には錦着山及び永野の清流を控へ居り夏むきには至極適當と存ぜられ候まゝ御休みなどにはちと御來遊下されたく待上げ候先は御知らせまで かしこ

(解題)

入学初年度、信子十二歳の時の転居通知の作文である。栃木県下都賀郡立栃木高等女学校（現在の県立栃木女子高等学校）は明治三十四年四月一日の創立。同校の『校友会誌』は明治四十年八月二十三日に創刊された。年刊。現在確認されているものは昭和十五年三十三号まで。ただし、同校にも保存されていない未確認の号もあり、特に吉屋信子在学中の第三号および卒業直後の第六号、七号が見えないのは残念である。

当時の除籍簿の記録と校友会誌の寄稿文の内容から、この時の吉屋一家の「轉宅」は、菌部六十七番地から片柳一二四九番地への転居をさすと思われる。文中の記述によれば「昨二日一同こゝに引移り申候」とあり、実際には七月二日に転居したか。これまでの菌部の住居は町外れにあるため不便な上に「むさぐるしく」とある。

信子の父吉屋雄一（一八五六—一九一九／安政三年八月七日—大正八年八月一日）は、山口県萩川島の出身で、地方官吏として各地を転任した。下関、松江、新潟などの警察畑を経て、真岡、栃木などの郡長を務める。信子の生まれた時は、新潟県庁内保安課長だった。信子は幼少期を栃木県の真岡で過ごし、真岡小学校に入学したが二期で栃木町の小学校に転校した。吉屋一家の新潟から栃木への転入、転籍の記録は以下の通りである。

明治三十三年八月四日

栃木県芳賀郡真岡町大字臺町十番地に転入

（新潟県北蒲原郡新発田本村五一六番地より）

明治三十五年九月二十二日

栃木県下都賀郡栃木町大字菌部二番地又号に転籍

明治三十六年七月十五日

栃木県下都賀郡栃木町大字菌部六十七番地に転籍

明治四十一年七月二十三日

栃木県下都賀郡栃木町片柳一二四九番地に転籍

大正元年十二月二十八日

栃木県上都賀郡鹿沼町大字鹿沼一八七五番地に転籍

資料3 「創立十週年記念式の模様を報ず」

『校友会誌』第五号創立十周年記念号 明治四十四年七月二十日発行

(署名) 本科第四學学年一組 吉屋信子

(本文) 明治四十四年四月廿二日本校にては創立十週年記念式に兼ねて成績品展覽會を行はれ申候 新學年始業式の當時より春陽の夢未醒めやらぬ時ながらその準備に校内は賑ひ申候 十年の功を名に負ひし壁も柱も如何ばかり光榮荷ひ申しゝか さは申せ卿の粧凝せしにはこれなく只赤心籠めし私等の手にて一昔の塵も芥も清められ候のみ 愈々樂しき日は明日と迫り申候 各室手落ちなく準備の終り候へしは夕陽花やかに西窓を彩る頃に候ひきされど誠熱もて盡す一同の心の何とて挫げ候ふべき 當日は疾く登校して各部署につき只管に時の至るを待ち申候

青き麥紅なる蓮華畑の間を車の二三臺走ればやがて門前に止まりて蓮歩匂いやかに校内に入り來らるゝ優しき人々は外ならぬ當校の卒業生方に御座候 さらぬだに懐しき母校にいと嬉しき祝賀の席に列せらるゝ君達の御心中こそ實に床しう存せられ候ひしか

小使室の忠實なる大時計の十時を報じ候へば五百の生徒は肅々と式場なる講堂に入り續いて卒業生及び來賓の方々も着席せられ候へばさしもの大講堂も立錐の地なく覺えられ申候 曾て 東宮殿下の御座所たりし壇上には紫の色濃き一流栃の葉の銀線輝き渡りて瓶なる蘇松との調和おもしろく仰げば右の官公左の紫女共にこの盛典を見守るが如く候ひき

やがて樂器につれて校歌は朗かに唱へられ申候

今日のあるじにておはします校長の君は徐々立つて式辞を述べられ候 十年記念の擧式は他を眞似たるにあらざ抑々教育の專業は永遠を期すべきものなり 十年の短日月豈事成れりと言ふを得むや 今日この式を擧ぐるものは畢竟生等の精神界に何物か有らしめむが爲なりと餘情言外に溢れて御辞の一句一句深く胸に刻まれ申候 あゝこの御辞こそは眞にこの式の生命なりと申すもいかで溢美の言に候ふべき

次いで學年の報告によりて幾多の來賓及び諸生に喜悅と満足とを與へて壇を降られ候へば溢るゝばかりの祝意を表せられて知事閣下當局者及び諸賓の祝辞これあり候 何れも行のいさをしを稱へ校運のめでたきを祝して尙小成に安んぜず愈々その向上を計るべしと懇篤なる訓を垂れられ候には數ならぬ身さいその責任の重大なるを覺へ

申候

卒業生総代の祝辞に次ぎて生徒総代の祝辞これあり再樂器の調高く響き候へば校長の物せられたる祝歌は奏せられ候 妙なる曲は堂内に充ちて窓を流れて中空に響くは和樂の叫歡呼の聲とき々なされ申候 これにて式は終り委員は直に展覽會場に行きて各任務に就き候が其うち幾分か手もあき候へば繰合せて全部を通覧仕り候 會場は階上の六室階下の二室を以て充てられ他校のはこの三室に陳列致され候ひしがその數もなか／＼多く少なからず私共の参考と相成り申候本校のは點數二千のあまり裁縫手藝品は純白なる敷布の上を五彩に飾りて艶麗を競ひ候は恰も秋の野山を一時に見るが如く和英習字圖畫の類は餘地なく壁間を飾りて白布上に置かれたる作文小字等と相對し候は室内をいと神々しく見せ申候 公衆の縦覽許され候てよりは各室とり／＼に賑ひ候て幾多の贊辭と賞揚との中に事なく會は閉ぢられ申候 この盛事は實に永遠の永久の思出事に御座候へばあらまじなりとも御間に達したく筆染め申候 亂筆不文の段御判讀の程願上げ候 かしこ

(解題)

一九一(明治四十四)年四月二十二日に行われた創立十週年記念式典の様子を報じた文章である。後に以下の紹介文とともに『よみもの学校史』(須田英 日向野徳久編集 発行所 栃木県立栃木女子高等学校社会クラブ 発行者 寺内貞亮 昭和三十一年十一月十五日発行/資料7参照)に転載された。

「創立十週年記念当時 吉屋信子先生は四年に在学しておられた。その記念式の模様を報じたすばらしい文章が校友会第才五号にのつていたのでここに転載する。当時のようすはこの文中にあますところなくつたえている。」

資料4 「返らぬ日の断片」

『校友会誌』第八号 大正三年七月十八日発行

(署名) 賛助會員 吉屋信子

(本文)

——この小さき物語を同期卒業の姉君方にさゝぐ——

逝く春の頃。(一)

鬱金櫻が咲きそめる頃、もうハラ／＼と一重さくらは静こゝろなく散りしく。そんなころは誰でもが室の中には、ぢつとして居られずみんな思ふどち手を引合つて校庭に落花を浴びて逍遙ふ。花壇のまわりに手鋏を持つて集ふ群。芝生の上に輪をつくつて若き日の戯れにふけるグループ。庭球のコートの上にラケットを花ぶゞきに舞はせて、みごとに球はアウトにしても、なほその豊な胸は誇に満ちたのであつたものを。

私は杉の苗木に植つた垣のほとりにM様と並んで小さく可愛いあの細い葉をもつ、うす紫の花、それは(姫あやめ)。そのきれいな星の泪の綴られたようなはなをよねもなく摘んでみたとき、黒髪を束掠めてひら／＼と飛ぶてふ／＼の數多いのふと幼いおどけ心につい、さそはれて、ふたりして緋のふり重ねた袂を補蟲器網に代へてあちら、こちらに逃さじとあの美くしい蝶々を追ひあるいて、一つ。二つ。その數の増えるのを喜びあふたので

《逃るといけないから、これに包みましょ。》

M様がうすもゝ色のハンケチをおひろげになつたので、その中にそつと／＼んで置のだった。一ぢかんのおひる休のをへるまでに、まあ、ずゐぶん採つたこと。しづかに響く鐘の音と共に潮のやうに流れこむ昇降口で、あやうく人波につぶされぬやう、てふ／＼の包を大切にふたりして守つて体操室へ入る。第二鈴の鳴るまでを整理して待つその間しばし騒がしさの静まつた時をみはからつて、M様と、あの、うすもゝ色のハンケチ颯とおし開けば忽亂るゝ、黄蝶。白蝶。あげは蝶東に西に北南、或は高く或は低く、白い翅黄ろい翅あげ羽の絞。彩なす美しくい繪巻ものを見るよに思はず恍惚と仰げば、あれ、にくや、第二鈴に静々と歩むゆくひとの足音、心は後にのこつても列にはづれず行進を續けながら振返れば、亜鈴の珠に球竿のキューにしばし羽根を息ふた蝶だちは、そのとき開けはなれた四方の窓から自由のみそらへとかへりゆくのであつた

初夏の歡び。(2)

若葉がくれた櫻ん坊がふつくらと色づけば皐月のやはらかい風に衣更した肌のよろこび。クロバーの花が純白とうすい淡紅色に咲く、四ツ葉をみ出して『幸多かれ』と長いひるやすみを費やして惜まない君達もおはしたことよ。何をかくさうわたしもそのひとりであつたので。

湯呑場と小使室の間のぢめ、した苔地に一本やせた椿の木がひよつこりと誰にもしられず生えてゐた、幹の小枝に青磁色にゆのみ茶碗が笠のやうにかぶせてあつた。

さみだれの頃、しとくクラリオネットの吸り泣くよな雨の中に濡れそぼつて美しく若い狂女の唇のよな葩をうなだらせて、やんがつてぼつくと根本に花の輪を落してしまふ。その椿の木は何とはなしにし、みくとなつつかしいものゝ一つにわたしひとり、おもつてゐたのであつた。

割烹のあつた日は、いつもかへりは遅かつたゆゑに、もう寄宿舎の電球にぼつと桃いろのタングステン灯がゆらめきそめてゐた、校門際の歌壇には淡黄な月見草がほのかにゆふぐれどきのうす靄の中にゆれて甘いあるかなきかのかぼそい香りを浮ばせてゐた。《まあいい花、一輪さしに。》と、友は手にく折とつたけど、わたしは白銀の玉を切つたよな夕月が大平山の彼方の空にほつきり浮かんたころ、ぼつちり、ひらくこの黄ろいは、なのまん中に埋もつて夜露にぬれてつゝましくひと夜を月光の流のもとに明したなら・・・と、しよせんおよびもない、あどけない空想にふけつたのだつた。

教員室と下階に裁縫室の窓下の小砂利の上に太陽のひかりを吸ひながら松葉牡丹のあでやかな花が咲くころになると一日く庭の松の木にあぶら蟬がふえてきていつとはなしに、みんなが夏やすみをまちわびる。

秋。(3)

おゝ。わたしの大好きな、大好きな、コスモスの花咲くころ。

紅いダリーヤもまだ園に女王のよにお化粧をしてゐても、あの清楚なコスモスのなよした葉とすつきりとした莖と淡泊の中に、いひ知れぬなつかしみを含んだ花になどまさることができやうか。

校庭のコスモスの花は、やせつぼちだつたけど、ほんにあえかにうるはしく氣高かつた。萩の花が前庭のまはりに紅

と白とにわけられて枝もたわむに露を結んでもすれば、おそろひの紅緒の草履をしめらしてしまふほど。

古風に言ふたなら（細殿）とでも名づけたいよなあ講堂へ入る廊下の片側の窓の下の潤ふた青苔の地の上に優しい秋海棠の花がさかりになるのだつた。しめやかに秋の小雨の降り出づる日。放課後の掃除番をはつてしばしあの窓に身をよせて何か愁を胸にふくんでしとやかに覆ひかくしてゐる美しいきむすめのよな、あのいちらしい赤くぼーと染まつた柔らかい莖や花をみつめてゐると何故とはなしにあつい泪が瞳に湧くのだつた。おてんきのよいひには、（せきれい）が花のしたにあそびに来るのだつた。

あした運動會といふ前の日のこと。朝誰よりも早く登校して赤い襷かけて銀色の鎌を握りグラウンドの草刈にと出づれば爽やかな秋のあしたは吹く風涼しく心地よかつた。

それよ、そのとき、ふと人の呼ぶ聲に空打仰げば、あれ、まあ、雁の一掉、南をさして、ひと連ね。その裏がへす羽根はをりからの曙の光に一どさつとひかる・・・。

はるか彼方の山の端に、殿の小雁を見送るまで私は露しげき草の上に佇んでゐた。

まだ初級の頃。清水先生に連れられて理科の時間郊外に植物採集に私どもは出た、籠の中から放たれた小鳥のよに私どもは跳まはつて川の岸に山の坂にいろ／＼の草花をみつけては先生のもとに、その名を伺ひにいくのだつた。友のさなぎめきから、ひとり離れて私はあてもなく田畑の畔を傳うて歩いていった。

水車の淋しくまはる小さい流のふちに、ふとみいだした、ひと群の花。

葉や莖はあかねさしてやさしげに、その花は古代紫色の小壺をふせたよなかたちゆゑもなくただそのはなの詩人めいてなつかしく、美しいローマンスを含む花のよに思はれてうれしく私はその花を折取りもと來し道へと走り先生にその名を問ひまゐらずれば《釣鐘草》と仰せられた。

その時からこの花を私が世界で始めて發見したよな氣がして、この紫色の小さいはな、忘れがたきものとなつたので。美しきあえかの白拍子志づかが身の《うす幸》の歎きあえない別れをつげたといふ哀にみやびな傳説のかたみそは校門前の御前塚。紅葉が教室の窓よりきれいに見えるので、わたしは歸り路にそつと丸木橋を、あぶない思してとほり、ひら／＼とまふもみちを拾つてきていちばん大切に置いて置く一葉全集にいくまいか葉のかはりにはさんでおいたりし



た。

その上かみのふゆ。

ふゆのをはりから春の始にかけて、わたしはぢがくど頭が痛むのが幼ない頃からのならはしであつたこととて、一ばん嫌な時節に思はれた。そのころが學年末であるゆゑいつも私はうら悲しい思をした。

夕日が山の彼方に赤ちやけたふゆの日没の色をそめるころは、つめたい風が校庭の砂をまきあげてガラス戸に音を立てる。

私どもはやる瀬ない悲しみを抱いて冷い講堂の白壁によりそひ、はかない別離の歌を口吟さまねばならない《とき》が來た。

——いイマアコヲソーワアカアレエーめエー　いイざあーさアーらーばアー。

ひときは高きソプラノの悲しき叫、アルトの痛ましき歎き。もろともに唱ひつゝ、いつしか私の頬を泪が傳はるのだつた。

スクールライフの最終の課目は地文の試験だつた。いつにない堀先生の御笑顔にも、別れの悲しみを覺えてわたくしは泪ぐましくなつた。答案を出してから、けふかぎりのいとしきぢぶんの席を立つて、いひしれぬ寂しい心持を抱いて教室を出て下駄箱をおろすとトトーンと人去つた校内に山彦のよに響き渡る。

やるせない哀傷のけはいが、さみどりにゆれて私の胸に絡はる。どんよりと、ふらず、てらずのうす曇りの私のだいきらいなおてんきのたそがれ。さらぬだにも寂しいこの胸、心。わたくしはぼんやりと櫻の木によりすがると黄ばんだわくら葉が思出したよに、サラ／＼とひるがつては散るのだつた。

泪にぬれた瞳にうちみれば梢の小枝には春まち顔の芽生が萼に包まれて眠つてゐた、おゝ。うらやましい櫻の木よ、花は散るとても葉は破るゝとも、またこん春には復活の日の興へられるものを。

われらが少女の日は、あえかにはかない夢の足跡をかけすく残して再返らじと悲しくも痛ましき《過去》の海底深く沈みゆきしうす桃いろの小貝であるものを。

嗚呼。返らぬ日。そは永久に、永劫に。

おもひでは、うす桃いろの賑かなし牡丹の 葩透すごとくに。——（三年四月のある日高輪毛利邸園にて。）

（解題）

栃木高女卒業の二年後、十八歳の時の文章。本文の最後に「三年四月のある日高輪毛利邸園にて」とあり、大正三（一九一四）年春頃に毛利邸の庭園を散策した際の回想らしい。吉屋信子の母マサ（文久二年五月十二日〜昭和二十五年一月十四日没／一八六二—一九五〇）はもと毛利藩土谷村留助の長女で、毛利家とはゆかりがある。当時、毛利家の当主は元昭公で、東京の芝高輪南町二十七番地に同氏の邸宅があった。毛利家は明治四（一八七二）年に、朝廷から高輪邸を拝領、大正初年ごろから元道公（元昭の嗣子）が住んだ。

資料5 「勿忘草」

『校友会誌』第九号 大正四年七月十八日発行

（署名）賛助會員 吉屋信子

（本文）ラインの河岸にこの一枚の花を愛人に捧げんとて水に溺れし若人の唯ひとこと。《忘れ給ふな》と叫びて、あへなく水底へ消えしといふ、その上の傳話に句ふ可憐な Forget me not のひとくさは、母校を別れゆき給ひし師の君の御胸近う贈りまゐらす、そはわが心に培はれし貧しき一莖の花。

そのひとつ。

『たとへ、かくれてなさつたことも神さまは、見てあつしやいます。』

かう淺野先生は私どもに言つてお聞かせ下さいました 柿色つばい、くすんだ色地のお袴を裳長う召して人なつかしい御面影は永久に忘れられません。

ある時、先生は愁ひに沈んで教室の扉をお開きになった、教卓にすらりとおよりになつて怪しい瞳を遊した空は鉛いろにとどちられて故しらぬ腦みを覺えるうす黒い感傷の日でございました。

先生は愁しげに優しい御唇をおひらきになつた、そして私どもは、この日が先生の姉上を失なはれた幾年か前の日に同じであつたことを知りました。もの悲しい心の翳影はそのとき先生のやさしきみ胸に満ちてをりましたらうに――机の上のリーダーは開かれずに、私どもはその時間、先生からあの優しき詩人アルフレドテニソンのうたうた（エノクアルデン）の、あはれにもなつかしい物語を伺ふ事が出来ました。

「はしびみ」の木の實散る小さき港の家に生ひ立ち三人のこども。ひとり美しく少女アニリイ、弱い少年フィリブレイ、強い男の子エノクアルデン。かくてこの三つの靈のもつれは悲しく優しい泪もて綴られてあるのでございまして。

あゝ、思ひ悩みしアニリイがある夜ひそかに小窓のほとりに聖燭の灯ゆるがして祈りと、ともにひもときしバイブルの上に打顫ふ手指を置いたところに、しるされてあつた《棕櫚の樹影に》。かう泪ぐむ瞳によみしアニリイ。

月の夜忍び見し窓の中の爐邊の團欒は、あの強いエノクに優しくいぢらしい「あきらめ」を芽生えさせて、つひに寂しく小さい旅舎の冷いベットのの上にミリアムレーンへ（ことづけ）の儂なきことばと、ともに過ぎし日の別れの朝揺り籠のなかに眠る兒の髪を形見と切りし幾すじかを證しの爲に託して、さびしく天へ昇つた哀れな船のりのエノクのこゝろ――あゝ、このものがたりを胸に繰りかへしては、いくたび泪に濡れたでせう私は、いまもなほ。

（家なき子）の小猿と犬とを連れた笛吹き的美少年と可憐な唾娘のおゆきさんも忘れぬ幻のひとつでございませう。

月のさえる宵は「月光と子ども」の譯詩を思ひ出て、ひとり緑の柱によつて口吟みつゝすぎし頃のなつかしさ慕しさにほろ／＼と泪ぐむでございませう。

別離の日唱あそばした先生のお好きの Home, Sweet Home のひとふしは優しかりしお面影と共に幾夜の夢に通はせて忍びまゐらすこととでございませう。

去年の秋のころ學び舎に別れ給ふとて、「明日ともいはず今日から淋しい」とおしるしになつた、お葉書を友と拜見した時は、庭の垣根にコスモスのほろ／＼散る日でございませう。

さらば。梢の花に小雨そぼふる宵も星かゞやく夕も、幸くませとはるかに祈り上げます。

そのふたつ。

私どもの歌に合せてオルガンを弾いてゐらつた大坂先生がびたりと鍵に踊る御指を止めておしまひ遊したことがございました。

草花のつぼみが含んでゐるやうな淡紅色の眞晝でした。先生はオルガンからつとお離れになつて窓へおよりになりました。

『せきれいつて可愛いと。』

と仰しやるので窓から庭を見ると、まあ私の大好きな《せきれい》がちよつと桐の廣葉のもとに餌を啄ばんでゐるのでございました。

ある時、しみじみとこの美しくい翅もつ小鳥が唄を知らないのを恨んだのでございましたけれども、歌を持たない《せきれい》は、あの妙なるオルガンの奏曲に耳を疊はされて、餌をあさるさい、うつゝの心に憧れたのでございませうものを。

『せきれいや、またあのお優しい音楽の先生のお窓へいつてあげて頂戴。』かういつも、あの小鳥を見るたびに願うのだつたのに。もうあのオルガンの窓には先生のお姿は永久にお見えにならないといふ……。

そのみつつ。

『すべて樂觀するがよい』

温室にならんだ花鉢のやがて春に會うて市井に出るやうに私どもも雨も風もかばうて、はぐくまれた校舎の窓から出る日が來たとき。甘く香はしい夢想の世界から幼き私どもの離れいつて現實の悲哀に泪ぐむその日のためにと、かうおさとし下さいました榎本先生。圖畫の時間に机の上でかいて下さつた桃の花に紙籬のいちまいの鉛筆畫は「日本ムスメ」の思出のためにと、私の手篋の中に包まれてございませう。

わびしく細い銀の糸のような雨ふる夜灯の影にこの繪を透し見てはありし日のご恩のあまたに泪するのでございませう。

七艸咲いて虫の小唄に露をまろばすころ、私の家にあつた小さい町の驛をお通りになつて湖上の燃ゆる紅葉の山へお登りになつたといふ、そのあけの朝朱に染めた印度綆紗の模様のような路を踏んで山の湖へまゐりましたけれども、そ

のときはもう母校の方だちも、はるかに越えてゐらつた先生も朱の波ゆるがす湖水に別れを告げてお降りになつたあとでございました。

羽衣はもたねども歌は濱の松の木にすがつて、私はやるせない瞳に遠き地平線の彼方にうす紫に煙る雲を見てわびしく佇んだのでございました。

その宵湖畔の宿の欄干によりて小船の残しゆくひとすじの青白い水脈の跡を見やれば、わびしくも憂愁のさ霧の中にいつしか、ひき入れられるのでした。そのときかいた小唄は、

月の灯に

銀が散る

われら

くさぶえ

吹かずして

水の面を

見ているぞよ

あゝ、薔薇色の月昇る頃としなれば、山の湖の面には、まろく輝やかな月光の流れ溢れるのでございませう、すぎし日のなつかしさと、離愁の泪を含んで。

(解題) 英語の浅野先生、音楽の大坂先生、図画の榎本先生という、母校の三人の恩師を懐かしむ文章。すでに前年にあたる大正五(1916)年七月に、「花物語」の第一篇「鈴蘭」が採用され、以後五十二編にわたる花にちなんだ連作が始まる。「花物語」と同じく、好ましいもの、美しくあわれな情趣を誘うものを並べてゆく「もの尽くし」の発想で書かれている。また、この年、二十一歳の信子はバプテスト女子学寮に入り、山田嘉吉から英語を学んでいた。

資料6 「母校を訪れて」(講演記録)

(本文)

有益な大橋先生の御講演の後故私は餘興の様な御話を致します。私は十七の時當校を卒業してすぐにこの地を離れて今年で十五年目になります。遠くに居りますので參る機會も御座いませんでした。所が、今度學校からの御招きを受けて御邪魔に出ましたら、私が卒業まで受持になつて國語、作文をみて下すつた丸山先生と、二ヶ年間歴史を御教下すつた竹本先生とがいらつしやいまして誠に嬉しい御座いました。それに講堂も當時のまゝで御座いますが、その頃はピアノが御座いませんでした。本を讀んでもピアノといふことがあればどんな物かと只想像して居りました。が、皆様は立派なピアノで御稽古が出来て誠にお幸福で御座います。こゝに私の母が參つて居りますが、今着て居ります黒い被布は、私がこゝを卒業する時着た紋附の羽織を染め直した物で、私が「そんな物着ては」といやがりましたら「學校に對する記念の品だから」と申して着て參りました。

學校は講堂も廊下も舊の通り大變綺麗で御座います。母校程よい學校は無く、その先生方はおえらいと思はれます。先達或雑誌の女學生のテニス選手の寫眞が出て居りましたのを友と觀て居て「栃木の生徒がやつぱり一番良い」と言つてしまひました。それほど母校はよい所で、何と言つても母校の空氣は楽しいもので御座います。皆様は私達時代よりもつと樂しさうに、伸びたい／＼と思つてゐられるやうに見えます。

昔は修身の時間に先生が話される事を生徒は只おとなしく聽いて居ましたが今はさうではありません。近い頃東京の女學校にあつた話でありますが、修身の時先生が女は「一家の經濟に注意せねばならぬ。御飯は御櫃についてのをよく集めて食べなさい」と申されましたら五年の一生徒は奮然起つて「女の胃袋は芥溜ではありません」と申して物議を醸しましたさうです。この様な事は昔には見られぬ氣分が出て來たので、これは婦人が目覺めて來た爲で御座いませう。今迄は女性は人の下についておとなしくして居りましたが、現今では進んで女子大學、高等師範、音樂學校、英學塾などに入學する様になりました。これは女性の考へが進んで利口になつた爲で、むやみに人の犠牲にならず、またむつかしい姑に事へる事は考へねばならぬと思つて來たのであります。農村婦人の働きを見ては知識ある者は馬

鹿らしく思ひ、そこを離れて都會に出て楽しく暮すやうにしようと思つてあせります。夫になる人も餘程しつかりしないといふ妻は言ふことをきません。併し世の中は一人で生きて居るのではありません、自分が大事ならば他人も大事です。他人が大事なら人間が大事、社會が大事、國家が大事アメリカも大事、地球も大事、全体が大事なのであります。今婦人が目覺めてモダンガールが現はれて來たのは仕方ない事でありませぬ。がもう一つ進歩して總てを愛する事が必要で御座います。かう感ずるには心の感情から始ります。文學や藝術は私達を進ませて呉れます。それによつて母性愛、家庭愛を養つて明るく過さねばなりません。

私は不如歸といふ小説を讀んで何とはなしに涙しました。つまり小説の中には愛情があるのだと思ひます。私は生來浪花節を好みませんでした、一日或家に招待を受けて一曲を聴いた時、何とは知らず心の絃に觸れるものがあつたと見えて思はず落涙致しました。これも愛情が含まれてゐるが爲で御座りませう。

女學校と小説とは至つて仲が悪う御座います。戀愛の空氣を吸ふやうな小説は學生に奨勵してはならぬと申しませぬ、良いものを選べば皆様の心に愛情を植ゑつけて參りませう。併しこれは私が小説を書くから御勸めするのではありません。良い小説に觸れる事は、魂に教育を受ける事になります。人は相當の年になれば脊丈は伸びませぬが精神は成長して參ります。その成長に手傳をせねば躰が生えませぬ。いつも新しい人間の氣持ちを知るには文學によるのが一番良しう御座います。大橋先生が御話しになつたやうに栃木縣人に殺伐な風があるのは非常に慨かましい事で御座います、それは何故でありますか。畢竟感情が精鍊されていぬ爲ではありますまいか。お互い人間同士が相扶け相愛し合つて行く爲には圓滿な感情の發達を要しますから、それには皆様は良い小説や本を澤山お讀みなさい。本の賣行は關東より關西の方が良しいと申します。關西人はそれだけ感情が豊富なのだらうと思はれます。少くとも小説を讀んだ人は犯罪者にはなりません。男子はえらい人間、お金持ち、大將になりたいといふ野心があります。そして社會の荒海に揉まれて行く爲、感情が圓くなりたく、またそれを養ふ餘裕も御座りませぬ。女性は小さい時お人形遊びをし、男子はいくさごつこを致します。このやうに女性は何かを愛さねばならないし、男子は戦はねばならないのであります。複雑になつたこれからの世は一人感情が豊富でなければならず、愛情を正しい意味に於て持ちこたへる事が必要であります。外國の本を讀むとその國の女性の事がわかりませぬ。氣持のもつれば讀書によつて融けます。

感情を正しく持つなら世の半分は明るく優しい心に待たれ、あとの半分は男子に持たれて、はじめて世界は平和になるのだと思ひます。

昭和三年四月廿二日講演

橋本登志、新井ヒサ、大和田美江記

(解題)

一九二八年四月二十二日、三十二歳の信子が母校を訪問した時の講演記録。この年の九月、信子は門馬千代と二人でフランスをはじめ、ヨーロッパ、モスクワなど各国を旅行している。

資料7 「少女の春の記憶」

『よみもの学校史』須田英 日向野徳久編集 発行所 栃木県立栃木女子高等学校社会クラブ 発行者 寺内貞亮  
昭和三十一年十一月十五日発行

(署名) 吉屋信子

(本文)

鈴蘭やわれには遠き乙女の日。

去年の夏北海道を旅行した時、行つた先々で色紙や短冊を出されて、仕方なくこんな駄句を書いたら、そのあとで私の廻つたあとあとと旅行された森田たまさんから（あの句はとてもよかつたわ）と、微笑して言はれててしまつた。

鈴蘭ではないが、女学校の思ひ出といわれれば、これもまた遠き乙女の日である。

父が官吏でその土地に在職中、私はその町の女学校に入学した、数へ年十三の春である。（女学生になる）といふことは、小学生の時から憧れだつた。ともかく小学校より程度の高いことが学べるといふ喜びだつた。その頃は制服でなく、海老茶色の袴の裾に一本の白いテープで縫ひつけるのが校章だつたと思う。



本科と実科とあつて、本科を志望しても実科に廻される場合があつたようだ。実科といふのは裁縫や手芸が主なので、不器用な私は、どんな事があつても、その科には入らないつもりだつた。

入学許可の発表には名前が紙に書いて張り出されるのだつた。その日の校庭に、一人眉目のきれいな色白の美少女が、うち萎れて憂鬱な顔をしてゐるのを見た。その人は本科を志望したのに実家に廻されたのだ、私はひどく気の毒な気がして、外の小学校から来た見知らぬ少女だつたが、なにか慰めの言葉がかけたかつたのだが、はにかみやの私はただ感傷的になつて黙つてゐた。

そんなことを私は時々思ひ出すからほんとに奇妙である。

その美少女もやがて卒業して、きれいな若奥さんになり、優しい母になつたら、その頃の思ひ出はほほえましくなつてかしく思はれるだろう。

入学式のあとだつたらう、雨天体操場で毬投げをして遊んでゐたら、誰れかの投げた毬が、その屋根裏を見せた雨天体操場の梁の間に挟まつてしまつた。登つて取れないから困つて皆で見上げてゐると、一人の若者が、窓枠の柱から梁によじ登つて、手を延ばして毬を取つてくれた。彼はどこか近くの村からついて来た父兄の一人のようだつた。少女たちの困つてゐるのを救ふのに役立つその英雄的な行爲に勇み立つて梁から毬を取つてくれた無邪気な若者の姿が今でも眼に浮かぶ。

その雨天体操場の窓近く鬱金桜が一本咲いてゐた。ただ桜とちがつて、春におくれて咲く薄黄の葩……私はその記憶で、あとで花物語という作に（鬱金桜）といふ一篇を入れることが出来た。

入学早々の理科で習つたのは（桜の花）だつた。植物教科書は三好学著だつたと思ふ。

小学校にはなかつた階段式の理科の教室へ入る時、なんとはなく一段学究社になつたような気持でうれしかつた。その黒板の脇の大きな箱の中には人体模型が入つてゐた。等身大の臘人形に、血管や内臓が彩つて示されてゐる。少女の私たちは時々怖いもの見たさにその箱の扉を開けては、キヤアツと声を出した。

やはり一年生の時のある日、その頃一高の校長で、有名な知識人とされてゐた新渡戸稻造博士が講演に來られて、私たちは講堂に集められた。

一年生の私は講堂の椅子の前の方にゐたので、演壇の博士を仰ぐような形になった。

博士の講演の内容は少女の私にもよく分った。それは一言で言へば、女子教育は良妻賢母を目的といふがまづそれより一步前によき人間になることだといふ意味だつた。

良妻賢母といふ言葉はまつたくその時代の女子教育と同義語だつたから、私は博士からまづ善き人間になる新らしい開眼を受けたような気がした。

しかし翌日、当時の教頭は一同を集めて、(博士は外国婦人を妻にしてゐる人だから、日本の女の教育の風習を知らない云々)と、昨日の博士の講演に反駁を加へられた。だが私は教頭よりも博士を信じてしまつたのは申しわけない。だからあまりいい生徒ではなかつたらう。

私にはそうした入学当初の下級生の頃の思ひ出がいき／＼としていつまでも宿つてゐる。

上級生になるにつれて、今でいふティーンエージの憂悶のようなものが起きて、文学少女になつてゐたせいか、楽しい思ひ出は一年生の頃のものである。

卒業後、私は、文筆業の虚名のおかげで、母校の招かれて講演などさせられたことがあるが、それは卒業生として母校をなつかしんで眺めることを妨げた。今度もし栃木の土地を踏む機会があつたら人知れず校門をくぐつて(我には遠き乙女の日)をなつかしんでみよう。

それはともかく五十年の歳月は、その地方の女性の教育機関としてどんな意味にもそこに学んだ少女の生涯に何かをプラスしてゐるにちがいない。あの木造の古びた校舎は今も生きてゐるのだとしみぐ思ふ。

### (解題)

題名の「少女の春の記憶」と署名、冒頭の「鈴蘭やわれには遠き乙女の日」の部分は吉屋信子の自筆原稿の写真である。掲載誌『よみもの学校史』は、栃木女子高校の教員と卒業生からなる「栃木県立栃木女子高等学校社会クラブ」の発行。「あとがき」によれば、栃木女子高の「五十五年の歴史」を「地方の文化史」として編纂しようという須田英、日向野徳久氏らの趣旨に賛同した吉屋信子はじめ、暮しの手帖社の大橋鎮子、花森安治、川島昌介らが協力したこと

が分かる。「社会クラブ」の詳細は不明だが、教員の指導のもとに地域の水害の研究や二三ヶ村の歴史調査、宇都宮大学の大島延次郎教授らを講師に迎えて研究発表会などを行っていたらしい。